

◆1次審査 講評文



同じことを問い続けるコンペは、審査員にもハードルが高い。
回を増す毎に、自ずと解には同じものが現れる。過ぎ去ったものが歴史でなく、過ぎ去りつつあるものを現在において問い把握し続けることが精神の高貴さであり、この可能性こそ本来的な歴史である。
日常の見慣れた風景に、「いま-ここ」で起こっている「課題」へ耳を傾け、
粘り強く問い続けて欲しい。刹那的なアイデアよりも繰り返し問い得る強靱で個性的なideaを見たい。

熊澤栄二 Eiji Kumazawa 石川工業高等専門学校准教授



今年で4回目の一次審査となりますが、毎回学生諸君が選んだ歴史的空間の題材を想像することも審査の個人的楽しみでもあります。今回は提出枚数が減った影響か、密度が上がった印象をもちました。それは、紙上のプレゼンテーションが巧みになっているということで、リアリティ（説得力）のある空間の再編力とはまた別の次元です。だからこそ、本審査での模型による小さくともリアルな歴史的空間の力を感じさせてくれることに期待したいと思います。

小津誠一 Seichi Kozu E.N.N.代表



力強い作品が多い印象を受けました。特に印象に残っているのは、世間一般に歴史的空間と言われているものをア prioriに受け入れず、自分で再定義している作品。地域の歴史的文脈を緻密かつ幅広いリサーチによってとことん読み込んでいる作品。
戦争や災害などの惨禍の記憶や人の死といった、近代が遠ざけてきたものと正対し、空間に埋め込もうとする作品。このような学生ならではのダイナミックな構想力には大いに刺激を受けました。

佐野浩祥 Hiroyoshi Sano 金沢星稜大学講師



歴コンも今年で4回目を迎え、これまでに色々なパターンの提案を見てきた。その上で、もっと強烈な出品者独自の感性・視点が必要ではないかと考えさせられた。
共通する題材、共通するテーマ、共通する手法が散見され、全国の様々な場所を題材としている意味合いが薄れている。情報の伝播とともに思考そのものも平準化している印象である。ここにしかない、そこでしか出来ないものを見つけ、提案してくれると、
きっと強いメッセージを持ったものが生まれるように思う。

吉村寿博 Toshihiro Yoshimura 吉村寿博建築設計事務所代表



字が小さい。読めません。
デザインや空間を扱う人だとは到底思えません。
ヒューマン・スケールを解せず、施主や施工者ともコミュニケーションが取れない建築家なのでしょう。
絶対に仕事は頼みません。

鷺田めるる Meruro Washida 金沢21世紀美術館キュレーター

